

古筆切の発生と源氏物語

田中 登

一 写本の特徴と古筆切の発生

周知のように、和本には人が手で書き写した写本と印刷した版本とがある。版本と比較した時の写本の特徴は、どの本もこの世に同じものが二つとない、唯一無二のものだということである。たとえば、同じ人が同じ作品を二度書き写したとする。「さくら」という箇所を一度目には「さくら」と平仮名で書いたが、二度目には「桜」と漢字表記することもあるだろうし、また同じ平仮名表記でも、一字一字の字母が違ってくるということも考えられよう。かくして、写本の世界にあつては、一点一点がまことにかけがえのない、貴重な品となってくる。そんなお宝品の本をみんなが欲しがったら、どうなるか。

日本には、古人の筆跡を尊ぶ風潮がいつの時代にもあつたが、とりわけ室町時代の後半ごろから、茶道の隆盛とも

相俟つて、それがひときわ盛んになると、それまで大事に保存され伝わってきた平安・鎌倉の書写になる一冊の本、一巻の書物を、一枚一枚の紙片に分割するに至った。こうしてできたのが、古筆切すなわち古写本の断間である。

二 写本の切断と古筆の鑑定

写本の形態には、卷子本と冊子本とがある。それを切断する場合、前者は適当な幅で切ればそれでよいが、後者はいささかやっかいな作業を要する。古写本に多く見られる綴葉装を例にしてこれを説明すれば、まず本の綴糸を切り、一枚一枚の紙片（元の本の四頁分）に分割する。ついで、その紙片を折目に合わせて切断し、さらに二枚の紙片（元の本の二頁分）に分割。さらに、その一枚一枚の紙の表裏を剥いで二枚とするわけだが、それでは紙が薄きに過ぎて破れたりする恐れがあるので、補強のために裏から紙を貼り（これを裏打ちという）完成となる次第。要するに、元の本の一枚の紙からは、四枚分の古筆切が採れるという計算になろう。

さて、こうして市場に出回った古筆切を、いわゆる愛好家が競って買い求めることになるわけだが、その際、どの誰が書いたのか知らないが、とにかくいい出来だというのでは、コレクターは納得しまい。現代人が宝石を買い求める心理と同じで、やはり誰が書いたのか、鑑定書ぐらいいは欲しいということになろう。そうした愛好家の求めに応じて登場したのが、古筆見すなわち筆跡鑑定家である。

今日、この江戸時代の古筆見たちの鑑定はほとんど信を置くあたわざるようにいわれているが、案外そうでもなく、彼らには彼らなりの鑑定基準というものがあつたのだが、今はその問題に触れない。とにかく彼らは客の求めに

応じて、一枚一枚の古筆切の筆者を鑑定し（このことを「極める」といった）、その結果を小さな短冊形の紙片に、だれそれと筆者名を書いて切に添えた。これを「極札」をいう〔写真1〕。また、こんなちっぽけな札では頼りないというむきには、全紙（切られていない元の一枚の紙のこと）を横に二つ折りにし、その折目を下にして、右だれその筆跡に間違いなし、などと大書して切（この場合は主として掛軸に仕立てられたもの）に添えたりもしたが、こちらの方は「折紙」〔写真2〕などと呼ばれている。

三 古筆切の保存・鑑賞法

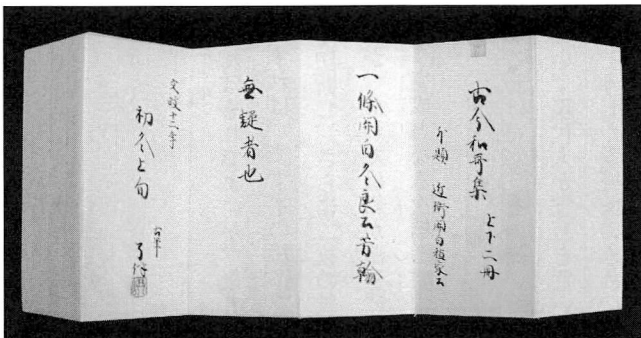
では、こうして集めた古筆切を、コレクターたちは、古来からどのようにして保存し、かつは鑑賞していたのであろうか。

まずは茶道との関連でいえば、掛軸の存在が挙げられよう。いうまでもなく、

〔写真1〕 極札

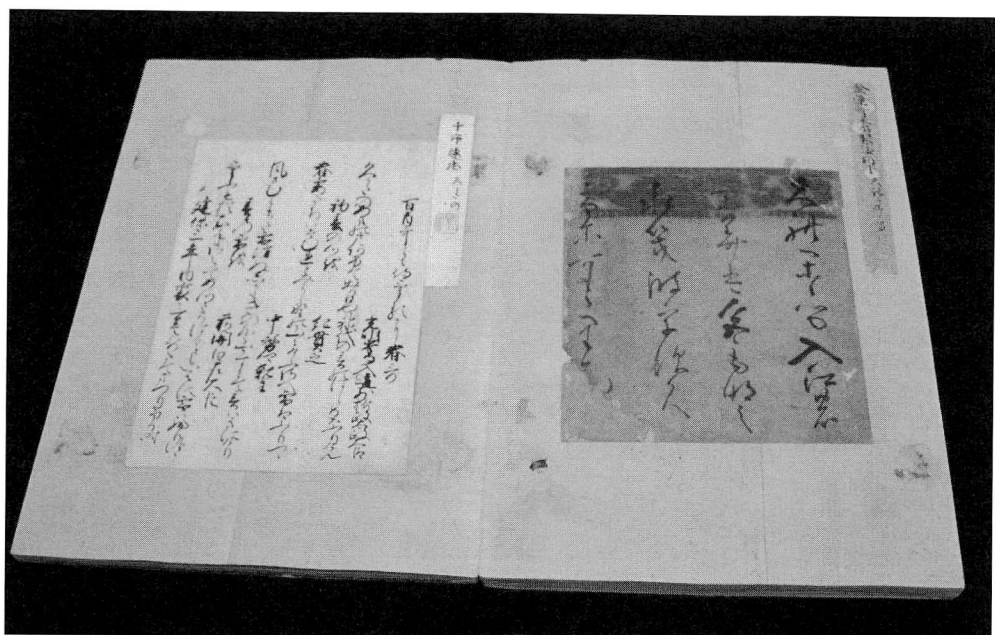


〔写真2〕 折紙





〔写真3〕 文芸資料研究所蔵「古筆手鑑」筆林



〔写真4〕 「筆林」

お茶道具の大事な要素として、茶室の床に掛けて鑑賞したわけである。通常掛軸には一枚の切しか貼らないから、これは一点集中主義ともいえようか。

次に考えられるのが、手鑑（帖）である（写真3・4）。日本画家が使用する画帖の大型のようなものに、何十枚、何百枚もの切を、身分別さらには時代順に貼り付け、天平の経、平安の仮名、鎌倉の消息、室町の色紙など、次から次へと繰り出される、時代の、あるいは個性の違う書を、順番に鑑賞していったわけである。手鑑の「手」とは筆跡の意。

最後に取り上げるのは、貼交屏風である。屏風は日本型家屋の家具調度品として欠かすことのできないものだが、その屏風に時代も内容も異なる様々な切（時に色紙や短冊が混じることもある）をバランスよく貼ったのが、貼交屏風である。その前に立てば、居ながらにして、時代も筆跡も異なる数多くの切を眼前にすることができ、そこには書の一大パノラマともいべきものが展開されることになる。

四 古筆切の書写内容

現在伝わっている古筆切は、はたして何万枚か何十万枚か、想像もつかないほどであるが、そこに書かれているものは、いったいどのような内容のものであろうか。

世に歌切という言葉があるように、現存する古筆切のおおよそ七割がたは歌集で占められており、物語を書いたものなど、全体の一割にも満たない、というのが実状なのである。これを言い換えれば、平安時代において物語は社会的評価がきわめて低かったということを意味しよう。源為憲の三宝絵詞の序に「また物語といひて女の御心をやるも

のなり」とあるように、当時、物語は婦女子の慰み物、というぐらいにしか考えられていなかったのである。

このことは、当時作者というものがどのように扱われていたかということに思いを致してみれば、ただちに了解されよう。古今集のような歌集（無論漢詩集でもそうだが）にあつては、かくかくしかじかの折に詠みました、だれそれ、といった具合に、作者名は必ず作品と共に公表されるが、物語にあつては、けつしてそうではない。源氏物語の写本は現在百本以上伝わっているだろうけれど、どの本を見ても、表紙に紫式部などと作者名を記したものはない。ことほどさように、物語の作者などというのは、社会的に軽んぜられていたのである。

このことを裏付けているのが、写本の書き手の側からの次のような発言である。平安から中世にかけて能書の家として知られた世尊寺家の伊行が記した夜鶴庭訓抄に「物語は、手書き書かぬことなり。人あつらふとも、とかうすべりて書くべからず」とあつて、勅撰集の奏覧本といえ、必ず時の能書家が筆を染めることになつていたのとは、まことに好対照をなしているといえよう。

こういった次第であるから、物語を書写内容とする古筆切はいたつて少なく、古筆切全体の一割にも満たない、という仕儀と相成るわけである。

ちなみに、歌集と物語以外の主なものは何かといえ、それは經典・仏書の類で、これが全体の約一割五分ほどを占めているが、これはもっぱら漢字の鑑賞のためであつた。

五 平安書写の古筆切の残存状況

平安・中世という写本文化の中で生まれた文学作品は、いったいどれほどの数の古写本・古筆切が残されているの

か、その数の多寡が、そのまま往時における読者数の多寡に直結する。今、平安時代につくられた主要作品の、現存する平安時代書写の古筆類の数を挙げてみると、

古今和歌集 約三〇種（内、完本は二点）

後撰和歌集 五種（完本はゼロ）

和漢朗詠集 約三〇種（内、完本は四点）

伊勢物語 一種（完本はゼロ）

大和物語 一種（完本はゼロ）

源氏物語 ゼロ（絵巻の詞書は除く）

こうしたみると、歌集と物語との差は歴然としていよう。伊勢や源氏が平安時代に読まれなかつたというわけでは、けつしてない。後代の作品に対する影響などから考えて、両作品が大変な人気を獲得していたことは、だれの目にも明らかなことである。ただ、千年もの時を越えて現在まで写本もしくは断間が残るには、今日からは想像もつかないほど数多くの写本がつくられる必要があつたのである。

六 物語の古筆切

歌集と比べると、圧倒的に数の少ない物語の古筆切ではあるが、それでも中世期の書写のものとなると、大分様相が異なってくる。古筆切研究のパイオニアともいべき藤井隆氏に「物語の古筆切を見たら伊勢か源氏と思え」という言^{〔1〕}があるように、中世書写の歌切を古今・新古今・朗詠が三分しているとすれば、物語の分野にあつては、伊勢と

源氏と二分している、といっても過言ではないのである。

今、伊勢・源氏以外の物語（ただし、歴史物語や軍記物語は除く）の古筆切の残存状況を示せば、以下のとおり。

狭衣物語 約四〇種

大和物語 八種（内、一種は平安書写）

竹取物語 一種

寝覚物語 一種（絵巻の詞書は除く）

鎌倉初期に成立した物語評論書の無名草子に「狭衣こそ源氏に次ぎてはようおほえはべれ」と評されただけあって、狭衣物語は約四〇種もの古筆切を現在に伝えているが、この数値がはたして多いか少ないかは、狭衣以下の大和・竹取・寝覚のそれと比較してみれば、一目瞭然たるものがある。後掲の源氏には遠く及ばずといえども、さすがに狭衣である。

七 源氏物語の古筆切

では、源氏物語の古筆切は、いったいどれほど伝わっているのだろうか。これについては、つとに小林強氏の報告^②があつて、それによれば、源氏物語そのものの古筆切として、氏は約三〇〇種もの存在を指摘しているのである。これは実に驚くべき数字ではあるまいか。先に私は平安時代書写の源氏の切はゼロだといった。にもかかわらず、実際にはこれほどの数の古筆切が伝存しているのである。このことは言い換えれば、源氏はそれだけ中世の享受資料に恵まれているということにほかなるまい。この豊饒な中世源氏物語の資料群を研究者は黙って見ている手はないので

ある。

さらに注意すべきは、物語そのものを写した切の数の多さもさることながら、それに付随して次のような断簡の存在も無視できるものではなからう。

- 1 絵巻の詞書
- 2 注釈書
- 3 梗概本
- 4 源氏集（源氏物語歌集）
- 5 源氏物語和歌作者目録
- 6 系図
- 7 年立

平安・中世において、物語は絵巻という形でも鑑賞された。源氏の代表的は絵巻は、いうまでもなく平安時代の制作になる徳川・五島本であるが、鎌倉にまで時代を下げれば、天理・メトロポリタン本もある。だが、ここで注意すべきは、徳川・五島本といい、天理・メトロポリタン本というも、現存本はいずれもそれがつくられた当初の形を完全に伝えておらず、零本にすぎないということである。このことは、絵巻の詞書が古筆切という形で今後まだまだ出現する可能性があることを意味しよう。現に後者の場合など、数年に一度ぐらいの割合で詞書の断簡が紹介^④されているし、またさらに、徳川・五島本や天理・メトロポリタン本以外の詞書の出現も^⑤けつして期待できないわけではない。源氏に限らず、絵巻の詞書は、古筆切研究の立場から、今以上に関心が持たれてしかるべき分野であろう。

源氏物語は、伊勢・古今と並んで注釈書の多いことで知られる作品だが、古筆切の中にはこの注釈書を書写内容と

するものも少なくない。ほんの一例だけを挙げれば、現存最古の注釈書たる源氏釈の一番古いものは、鎌倉中期ごろの書写とされる伝顕昭筆建仁寺切であり、これは同書の研究に欠かすことのできない資料となっている。

源氏のような大部の作品ともなると、皆が皆五十四帖揃いのテキストを手元に備えるということは不可能なので、手ごろな梗概本を以てそれに代えるということが行われていた。およそ南北朝ごろに連歌師が編集に関与したかと思われる梗概本については、今日源氏大鏡とか小鏡という名称で知られているが、鎌倉期書写の古筆切に見る梗概本は、それらとは大分性格が異なり、可能なかぎり編者の言葉は差し挟まず、原文を適宜抜粋して話しを続けてゆく方法である。往時における源氏享受の資料として注目しておいてよいものであろう。

中世という時代は、何事によらず和歌的関心のきわめて強い時代であった。源氏に関しても、けっしてその例外ではない。藤原俊成や定家が所持していたという源氏集なる作品は、最近冷泉家の鎌倉期写本（ただし零本）が紹介され、ようやくその実体が明らかになりつつあるが、古筆切の中には、伝西行筆切・伝源頼政筆切・伝寂蓮筆切など、鎌倉初期ぐらいいまでは十分に遡ることが可能かと思われるものがあって、中世における源氏集の種々相⁵を伝えて、貴重な資料となっている。

源氏物語中の和歌への関心が昂じてくると、その結果、おのずと和歌に関する作者目録（現在でいうなら作者事典のようなもの）が要求されるようになってくる。勅撰集のそれに関しては、古今和歌集目録の存在がよく知られているが、いわばその源氏版である。従来、顕昭の建仁寺切には、源氏釈と系図との二種類があるといわれてきたが、その系図の方は、最近の研究の結果⁶では、系図にあらずして、和歌作者目録とみるべきであることが判明した。

〔図5〕 文芸資料研究所蔵「河内本源氏物語」薄雲の巻・古筆切

ふらり小舟に乗りていづるに
白いしやうのうらなひのうらなひ
わしは（きこひ）のうらなひのうらなひ
ほろろとわらわらしくおしり入のうらなひ
るふとわらわらしくおしり入のうらなひ
ふらり小舟に乗りていづるに
わしは（きこひ）のうらなひのうらなひ
ほろろとわらわらしくおしり入のうらなひ
るふとわらわらしくおしり入のうらなひ
ふらり小舟に乗りていづるに
わしは（きこひ）のうらなひのうらなひ
ほろろとわらわらしくおしり入のうらなひ
るふとわらわらしくおしり入のうらなひ

八 享受資料としての源氏物語古筆切の活用

以上、源氏物語の古筆切について、そのあらましを述べてきた。近年、源氏物語の伝本研究は、これまでの成果が大きく見直されているのが現状のようであるが、古筆切は書写年代こそ古いものの、断簡というその性格上、これを本文研究そのものに役立てるといふことは至難の業といえよう。なぜなら、巻が違えば本文も書写者も違うことがあるからである。

そこで考えられるのは、享受資料としての古筆切である。今日の前にある一枚の断簡の本文が何系統であれ、とにかく、それが鎌倉書写のものなら、鎌倉時代にそのような形で源氏を読んでいた人たちがいたということだけは確かなことであつて、何人たりとも、これを否定し去ることはできない。平安の古典作品が現在まで伝えられるには、中世の人々の書写活動の力が預かつて大きい、そうした中世の享受の実態にせまる資料として、この豊饒な源氏物語の古筆切の世界に、われわれは関心を寄せずにはいられないのである。

注

- (1) 藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』（和泉書院・昭和六〇年）
 - (2) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（『本文研究』第六集・平成六年）
 - (3) 藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』（和泉書院・平成元年）
- 田中登『平成新修古筆資料集成』第二集（思文閣出版・平成一五年）

- (4) 田中登「源氏物語絵詞二題」(『汲古』第四六号・平成一六年)
- (5) 田中登「『源氏集』の種々相」(『源氏物語の展望』第六輯・三弥井書店・平成二一年)
- (6) 田中登「源氏物語和歌作者目録の存在」(『関西大学文学論集』第五八卷第一号・平成二〇年)